

# 誰かの人生支える黒子

## 研究は面白い

大学教員に聞く

⑨

指すことになった。通っていた中学に特別支援学級が併設されていたことや父が精神科病院に勤めていたこと、近所に住んでいた聴覚障害者や発達障害のある人との交流などが志望に影響したと思う。

北星学園大学の中村和彦教授(57)＝副学長＝は「ソーシャルワーカーとして困難を抱える人や周囲の人々に寄り添って来た」「本人の自己決定を尊重する、そとと愚弄として支援するのが役目」と語る中村教授に、仕事の魅力や近年の傾向などを聞いた。

(聞き手・安藤有紀)

教員の道へ入った。

ソーシャルワークの道に進んだ経緯は。

高校生までは真剣に役者を志していた。演劇学科がある道外の大学の進学を考えていたが、高3の12月に父が亡くなり道外への進学を断念、他に興味があった特別支援学教員を自

ソーシャルワーカーとは。困ったことがあったとき、家族でも友達でもない他者の力を借りなければならぬ場面が必ずある。カウンセラーは心の相談に対応するが、片ひたり別題もある。生活は、人ひとりが別々で、複雑に絡み合っている。



専門はソーシャルワーク実践論、精神保健ソーシャルワーク。講義では多角的な視点で課題をとらえる大切なことを伝える。

いなくともいい世の中。本人が自分の力で次のステップに進めるようにそとと愚弄として支援するのが役目と思っている。

―近年の傾向は。

多様性の時代において、高齢者や障害者の問題に限らず外国人や性的マイノリティー、災害などソーシャルワークが絡む場面は多く、領域は急速に広がっている。今風に言うと「困りごと」と「困り感」というようなものを言め、はたから見ると問題がなくて感じられても本人は他者とのコミュニケーションに悩んでいる、入院するほどではないが不調を抱えている、眠れないというような人が増えている。

「精神医学ソーシャルワーク」から「メンタルヘルスソーシャルワーク」へと大きくシフトしている。

高校生へのメッセージを。若者の課題の一つがSNS。SNSでつながっている人が知り合いかどうか、内容が事実かどうかは関係なく、そこを見たものと自分を比べて落ち込んでしまったりSNSに巻き込まれて逃れられなくなっている。

―専門分野の魅力は。

専門はソーシャルワーク実践論。精神保健ソーシャルワーク。ソーシャルワークで大切なのは、本人の自己決定を尊重すること。人と環境の交互作用も重要。例えばその人の抱える課題が本人の理由によらない場合も多く、そのときは周りを委ねることで解決に向かうことができる。家族やその他のコミュニティを見て周囲の環境もトータルを考えた必要がある。そこにソーシャルワークの面白さと魅力がある。

一方で、私たちが最終的に目指すのはソーシャルワーカーが

## 北星学園大学

### 中村 和彦教授(57)



小樽市生まれ。北星学園大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了、龍谷大学大学院博士(社会学)。2009年北星学園大学社会学部福祉臨床学専攻教授、12年同学部長、20年学生部長、21年4月から現職。

大学には、人生を懸けて白紙に、研究に打ち込む研究者がいる。彼らの、中高生に向けたメッセージを紹介する。(月一回掲載します)